

# 中国



## 1 農・畜産業の概況

2023年の中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は7.5%であり、就業人口に占める1次産業従事者の割合は22.8%となっている（表1）。

また、中国の農林水産業の総生産額は増加傾向で推移しており、23年は前年比1.6%増の15兆8507億元となった（表2）。部門別の割合については、農業（耕種）は54.9%と1980年と比較して減少した一方で、畜産業は24.6%と増加した。

表1 農林水産業の地位

（単位：億元、万人）

区分／年	1980	1990	2000	2021	22	23	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	1,149,237	1,204,724	1,260,582	4.6%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	86,995	92,577	94,463	2.0%
割合(%)	29.9	26.8	14.9	7.6	7.7	7.5	▲0.2ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	74,652	73,351	74,041	0.9%
第1次産業	29,122	38,914	36,043	17,072	17,663	16,882	▲4.4%
割合(%)	68.7	60.1	50.0	22.9	24.1	22.8	▲1.3ポイント

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

（単位：億元）

区分／年	1980	1990	2000	2021	22	23	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	147,013	156,066	158,507	1.6%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	78,340	84,439	87,073	3.1%
割合(%)	75.6	64.7	55.7	53.3	54.1	54.9	0.8ポイント
畜産業	354	1,967	7,398	39,911	40,652	38,965	▲4.2%
割合(%)	18.4	25.7	29.7	27.1	26.0	24.6	▲1.4ポイント
林業	81	330	937	6,508	6,821	7,006	2.7%
割合(%)	4.2	4.3	3.8	4.4	4.4	4.4	(変動なし)
水産業	33	411	2,713	14,507	15,468	16,116	4.2%
割合(%)	1.7	5.4	10.9	9.9	9.9	10.2	0.3ポイント
その他	0	0	0	7,748	8,686	9,347	7.6%
割合(%)	0.0	0.0	0.0	5.3	5.6	5.9	0.3ポイント

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値。

畜産物に関し、23年の1人当たり消費量を見ると、都市部、農村部ともにすべての品目が前年比で増加した。特に牛肉の消費量は都市部（前年比21.9%増）、農村部（同37.5%増）ともに大幅に増加しており、豚肉の消費量も都市部（同10.4%増）、農村部（同17.1%増）ともかなりの程度増加している（表3）。これは、18年8月に中国で初めて発生したアフリカ豚熱（ASF）の影響により、豚肉の買い控えや家きん肉など他の食肉に消費が移行していたが、豚肉は中国の伝統的な食材であり、豚肉の供給が回復し、安定するにつれ消費が戻ったためとみられる。

表3 畜産物の1人当たり年間消費量

（単位：kg/人）

区分／年	2019	20	21	22	23	前年比 (増減率)	
都市部	牛乳乳製品	16.7	17.3	18.2	15.4	16.3	5.8%
	牛肉	2.9	3.1	3.2	3.2	3.9	21.9%
	豚肉	20.3	19.0	25.1	26.0	28.7	10.4%
	家きん肉	11.4	13.0	12.3	11.9	12.6	5.9%
農村部	牛乳乳製品	7.3	7.4	9.3	8.4	8.9	6.0%
	牛肉	1.2	1.3	1.5	1.6	2.2	37.5%
	豚肉	20.2	17.1	25.4	28.1	32.9	17.1%
	家きん肉	10.0	12.4	12.4	11.4	12.0	5.3%

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

牛乳・乳製品の消費量は、人口増加や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。2008年に発覚したメラミン混入事件は、国産育児用調製粉乳などに対する消費者の不信感から輸入需要の拡大につながったが、その後の政府や乳業による信頼回復への取り組みなどを通じ、近年は、国産需要が高まりつつある。

国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、23年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は、22年に引き続き世界第3位であり、全世界の生乳生産量の5.1%を占める。

#### ア 生乳の生産動向

地域別の飼養頭数を見ると、冷涼な中国北部で多く、上位6省・自治区で全体の約6割の頭数を占めている（図1、2）。飼養頭数は国内需要を背景に2008年ごろまで急速に増加し、それ以降は横ばいで推移していた。近年は、健康志向の高まりを受け、乳製品需要が増加したことなどを背景に増加傾向で推移しており、23年は、前年比6.3%増の1233万頭となった（図3）。

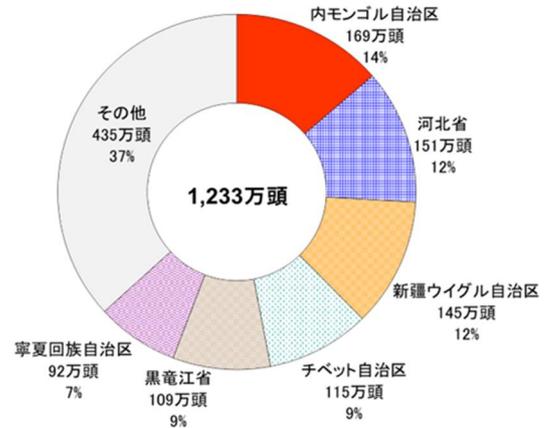
また、飼養農場の規模は、飼養頭数49頭以下の農場が全体の97.0%を占めている（表4）。

図1 乳牛飼養頭数上位6省・自治区（2023年）



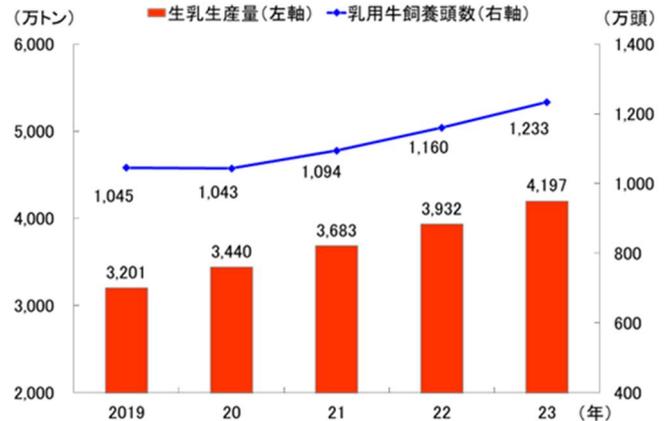
資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図2 省・自治区別乳用牛飼養頭数（2023年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図3 乳用牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生乳生産量）、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養頭数）

表4 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2023年）

区分／規模	（単位：千戸）								
	全体	1～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1000～1999頭	2000～4999頭	5,000頭以上
戸数	456.5	442.6	7.2	2.5	1.5	1.1	0.8	0.6	0.3
割合	100.0%	97.0%	1.6%	0.5%	0.3%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

## イ 牛乳・乳製品の需給動向

生乳の生産量は増加傾向で推移する一方、乳製品の原料などに利用される全粉乳や脱脂粉乳、直接消費としての飲用乳などの輸入量は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行時の健康志向の高まりなどもあり、2021年までは増加傾向で推移してきた。しかし、23年の乳製品主要8品目の輸入量は、国内での生乳生産量の増加や需要低下などを受け8品目中5品目で前年割れとなった（表5）。このような中、全粉乳をはじめチーズ、バターなどの最大の供給元であるニュージーランド（NZ）からの乳製品の輸入については、両国間の自由貿易協定に基づき24年1月1日から関税が撤廃された<sup>（注1）</sup>。

（注1）詳細は、海外情報「中国向け乳製品、全品目の関税が撤廃（NZ）」  
（[https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01\\_003696.html](https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003696.html)）をご参照ください。

表5 乳製品輸入量の推移

（単位：万トン）

区分／年	2019	20	21	22	23
全粉乳	67	64	85	70	43
ホエイ	45	62	72	60	66
飲用乳	89	104	127	98	81
脱脂粉乳	34	34	43	34	34
育児用調製粉乳	36	35	27	28	24
チーズ	11.5	12.9	17.6	14.5	17.8
バター	9.1	12.3	13.9	15.3	14.0
ヨーグルト	3.2	2.8	2.5	2.2	1.8

資料：USDA/FAS「PSD Online」（全粉乳、飲用乳、脱脂粉乳、チーズ、バター）、「Global Trade Atlas」（ホエイ、育児用調製粉乳、クリーム、ヨーグルト）

注：HSコードは、ホエイは040410、育児用調製粉乳は190110、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち、多用途で用いられる全粉乳（育児用調製粉乳や還元乳のほか、ヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料）の需給を見ると、23年の消費量は前年比8.7%減の159万トンとなった（表6）。また輸入量は、近年、増加傾向で推移していたが、乳製品の需要低下などを受け、23年は同38.5%減の43万トンと大幅に減少した。

表6 全粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2019	20	21	22	23
生産量	105	99	101	105	120
輸入量	67	64	85	70	43
輸出量	0.1	0.1	0.2	0.3	1.1
消費量	172	159	181	175	159

資料：USDA/FAS「PSD Online」

また、脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量は少ないが、23年の消費量は同3.1%増の37万トンとなった（表7）。

表7 脱脂粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2019	20	21	22	23
生産量	1.5	2.0	2.2	2.5	3.0
輸入量	34	34	43	34	34
輸出量	0.1	0.1	0.2	0.1	0.3
消費量	36	36	45	36	37

資料：USDA/FAS「PSD Online」

飲用乳の消費量は、15年をピークに減少していたが、18年以降は増加に転じており、23年は同5.8%増の4369万トンとなった（表8）。特にCOVID-19流行下では、政府が乳製品の消費を推奨したことも消費量の増加に寄与している。

表8 飲用乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2019	20	21	22	23
生産量	3,298	3,550	3,795	4,035	4,290
輸入量	89	104	127	98	81
輸出量	2.5	2.5	2.3	2.4	2.5
消費量	3,384	3,652	3,920	4,130	4,369

資料：USDA/FAS「PSD Online」

英国の市場調査会社であるユーロモニターインターナショナル社によると、23年の主な牛乳・乳製品の小売販売数量について、牛乳が増加しているのに対し、ヨーグルトとチーズは減少しており、中でも、チーズは大幅に減少している（前年比20.3%減、表9）。牛乳については、地方を中心にコールドチェーンが未成熟なことから、常温保存牛乳（滅菌乳）が広く普及（牛乳販売量の8割程度）しているが、近年では都市部を中心にコールドチェーンが整備され、価格の高い低温殺菌乳<sup>（注2）</sup>も流通している。ヨーグルトについては、「飲む」タイプのヨーグルトを中心に普及している。また、チーズは、プロセスチーズが販売量の7割程度を占め、ピザやハンバーガーなど外食需要を中心に消費が広がってきた。近年では、子供向けのチーズスティックを中心に、家庭内消費も増加してきたが、出生率の低下などから、22年以降は消費量が減少している。

（注2）：中国の低温殺菌乳は60～90度殺菌であり、日本の低温殺菌乳（63～65度殺菌）とは定義が異なる。

表9 主な牛乳・乳製品の小売販売数量の推移

(単位:万トン、千万リットル)

区分/年	2019	20	21	22	23
牛乳	900	943	988	987	1,006
うちLL	747	784	806	812	829
うち冷蔵	153	158	183	175	177
フレーバーミルク	725	665	702	639	632
ヨーグルト(液体)	820	805	778	671	612
ヨーグルト(それ以外)	183	173	165	141	134
チーズ	5.5	7.8	10.0	10.5	8.4

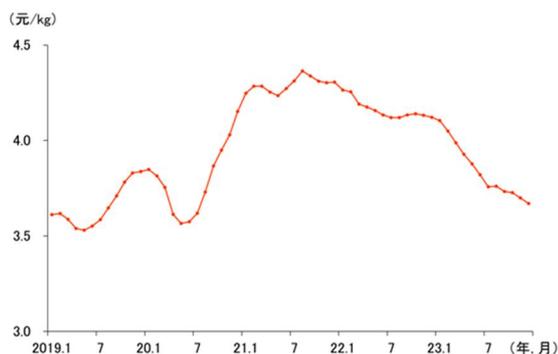
資料：ユーロモニターインターナショナル社

注：ヨーグルト（液体）はリットル、それ以外はトン。

## ウ 生乳の価格動向

生乳価格は、2019年以降、季節的な変動はあるものの堅調な需要に後押しされ、上昇傾向で推移し、特に20年末からは1キログラム当たり4元を超えた(図4)。23年2月以降は、国内の生乳生産量が増加している一方で、乳製品の国内需要が低下していることから、下落に転じた。

図4 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要生産省・自治区（河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒竜江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆）における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

## エ 販売風景

中国では多くの低温殺菌乳が紙パック容器ではなく、ペットボトルで販売されている(写真1)。常温保存が可能な滅菌乳は、飲みきりサイズのを10~20個程度(写真は250ミリリットル×10個入り)まとめて箱詰めし、目立つ印刷を施して売られている点が特徴的である(写真2)。

また、乳製品は贈答品としても利用されており、綺麗に包装された輸入品のホエイパウダーなども販売されている(写真3)。



写真1 スーパーでの乳製品の販売状況(北京市内)



写真2 山積みで販売されている滅菌乳(北京市内)



写真3 贈答向けの輸入ホエイパウダー(北京市内)

## (2) 肉牛・牛肉産業

### ア 肉用牛の飼養動向

中国で商業的な肉用牛の生産が始まったのは1990年代といわれており、それまで牛は、主に役畜として飼われていた。肉用牛として飼育されているのは、主に黄牛（在来種）とシンメンタル種の交雑種である。品種改良の観点などからアンガス種などの生体牛輸入も増加していたが、主要な生体牛の供給元であったNZにおいて、2023年4月末までに海路での生体家畜輸出が全面的に禁止となったことなどから、23年には生体牛輸入は大幅に減少した。

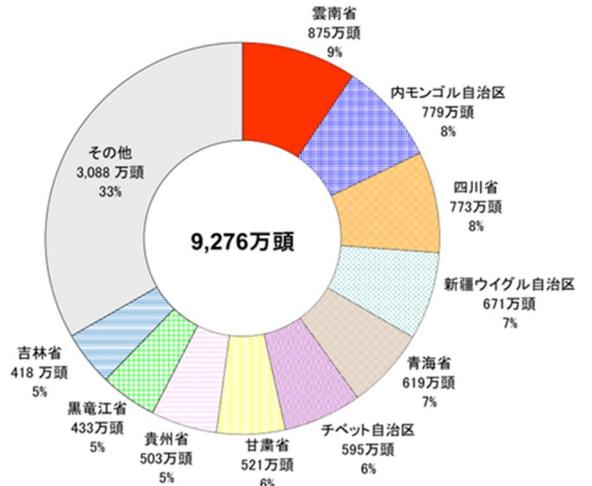
飼養頭数を地域別に見ると、役畜として利用されてきた内陸部での飼養頭数が多く、飼養頭数が400万頭以上の上位10省・自治区で全体の約7割を占めるなど偏在している（図5、6）。また、飼養農家は零細が極めて多いのも同様で、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の91.1%を占めている（表10）。

図5 肉用牛飼養頭数上位10省・自治区（2023年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

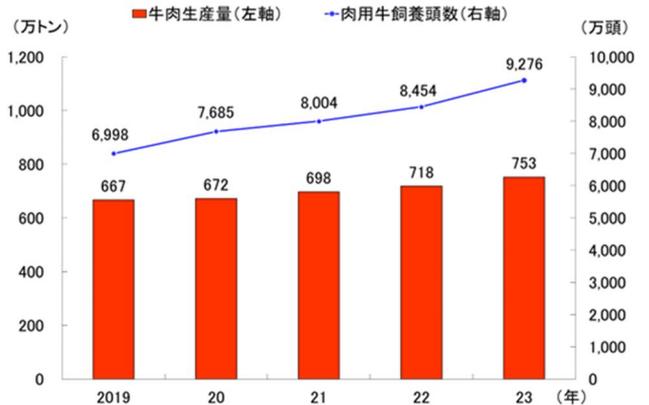
図6 省・自治区別肉用牛飼養頭数（2023年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、共に増加傾向で推移しており、23年の飼養頭数は9276万頭、牛肉生産量は753万トン（枝肉重量ベース）となった（図7）。米国農務省によると、23年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の6割強）であり、全世界の生産量の約1割を占めている。また、中国の牛肉は伝統的に豚肉を食さないイスラム教徒による消費が多く、ハラールの牛肉が多く売られているのも特徴とされる。

図7 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養頭数）

表10 肉用牛の出荷規模別の農場戸数（2023年）

区分／規模	(単位: 万戸)						
	全体	1～9頭	10～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	741.2	675.4	52.6	9.9	2.9	0.3	0.1
割合	100.0%	91.1%	7.1%	1.3%	0.4%	0.04%	0.02%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

## イ 牛肉の需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加を続けており、2023年は1109万トンとなった(表11)。一方、国内の牛肉生産量は増加しているものの、拡大する需給ギャップを埋めるべく、輸入量も急増している。同年の主な輸入相手先はブラジル(輸入量全体の4割強)、アルゼンチン(同2割弱)、ウルグアイ(同1割強)、NZ(同1割弱)となった。現地専門家の中には、これ以外に統計に表れない相当量の非正規輸入品が中国の国内市場で流通しているとの見方もあるが、詳細は不明である。

表11 牛肉需給の推移

(単位:万トン)

区分/年	2019	20	21	22	23
生産量	667	672	698	718	753
輸入量	218	278	302	350	358
輸出量	2.1	1.6	1.7	2.0	1.8
消費量	883	949	999	1,066	1,109

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生産量)、  
USDA/FAS「FAS Online」(輸出入量、消費量)  
注：枝肉重量ベース。



写真4 スーパーでの冷蔵牛肉販売風景(上海市内)



写真5 スーパーでの冷凍牛肉販売風景(北京市内)  
「和牛」ラベルが貼られた豪州産WAGYUも販売されている。

## ウ 牛肉の価格動向

牛肉の卸売価格は、需要の拡大に伴い2014年に高水準となったが、15年後半以降は輸入量の増加から下降基調で推移していた。18年以降は、中国国内でのASF発生の影響による豚肉価格の上昇に伴う代替需要や、外食需要の高まりなどから、一転して上昇傾向で推移した(図8)。21年に入りやや下落に転じたものの、後半以降は持ち直し、23年前半までは高値で推移した。同年5月以降は、1)生乳価格の低下を受けて乳用牛の淘汰が進み、牛肉生産量が増加したこと、2)豚肉価格の下落により相対的に価格の高い牛肉の購買意欲が低下したこと一などから下落に転じたが、同年8月以降は祭日(国慶節・中秋節)での牛肉需要の増加などを受け、やや値を戻した。

図8 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部



写真6 スーパーでの冷凍牛肉販売風景(北京市内)  
「清真」(ハラール)マークがついている商品も多い。

### (3) 養豚・豚肉産業

豚肉は伝統的な食材であり、中国の食肉生産量の約6割を占めている。米国農務省によると、2023年の中国の豚肉生産量と消費量は、いずれも世界の約5割を占めており、ともに第2位のEUを大きく上回っている。

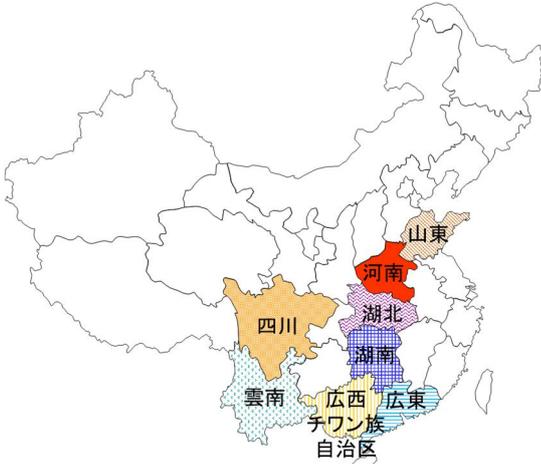
#### ア 肉豚の飼養動向

地域別の豚飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位8省・自治区で全体の5割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる（図9、10）。

飼養頭数は2012年以降、減少傾向で推移し、特に19年には前年に発生したASFの影響で前年比27.5%減の3億1041万頭となった（図11）。その後は豚肉価格の上昇や大規模農家の増加などから飼養頭数は急速に回復し、21年以降はASF発生前の水準を超えて推移している。

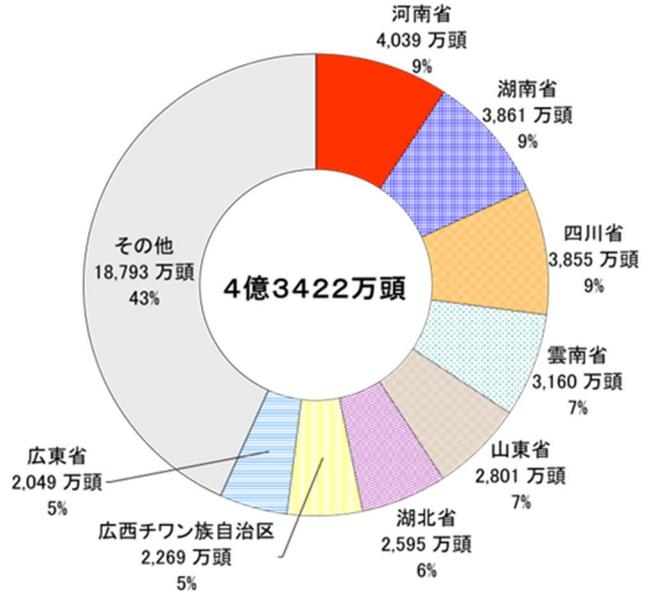
一方で、養豚農家の飼養規模は零細とされる小規模のものが極めて多く、年間出荷頭数が49頭以下の農場が全体の93.3%を占めている（表12）。

図9 豚飼養頭数上位7省・自治区（2023年）



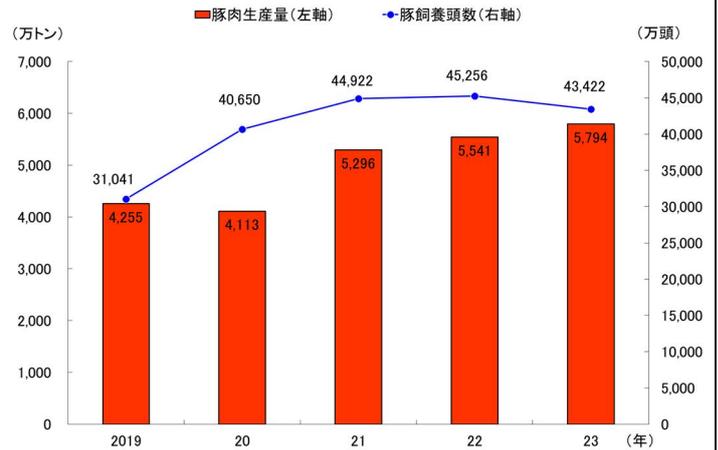
資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図10 省・自治区別豚飼養頭数（2023年）



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図11 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

表12 豚の出荷規模別の農場戸数（2023年）

区分／規模	（単位：万戸）									
	全体	1～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000～2,999頭	3,000～4,999頭	5,000～9,999頭	10,000～49,999頭	50,000頭以上
戸数	1,823.1	1,701.3	65.6	38.1	9.5	5.4	1.6	0.9	0.6	0.1
割合	100.0%	93.3%	3.6%	2.1%	0.5%	0.3%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

## イ 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移しており、19・20年は、18年に発生したASFの影響が本格化したため生産量が大幅に減少した。しかし、21年以降は飼養頭数の増加などから生産量は急速な回復を見せ、ASF発生前の水準を上回り、その後も増加基調で推移している（表13）。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきた。19・20年はASFの影響による豚肉価格の上昇などにより、需要が他の食肉に移行したことで大幅に減少したが、飼養頭数の増加につれて豚肉価格も安定したことで、22年の消費量はASF発生前の水準に回復し、その後も増加基調で推移している。

23年の輸入量は、ASFの発生による国内生産への影響から増加した20・21年に比べて大幅に減少しているものの、ASF発生前の水準を上回っている。

表13 豚肉需給の推移

(単位:万トン)

区分/年	2019	20	21	22	23
生産量	4,255	4,113	5,296	5,541	5,794
輸入量	245	528	433	213	190
輸出量	14	10	10	10	10
消費量	4,487	4,152	5,172	5,743	5,974

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、  
USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量、消費量）

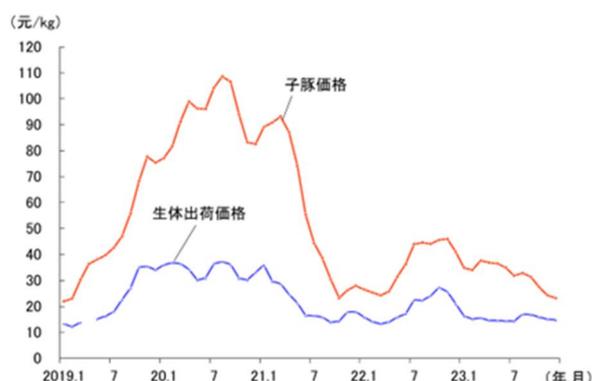
注：枝肉重量ベース。

## ウ 豚肉の価格動向

2018年に発生したASFの影響から飼養頭数、生産量が減少したため、19年に入り生体出荷価格、子豚価格は共に急騰した（図12）。19年半ばにASFの感染リスクが低減したとの判断が大勢を占めたことで、増頭機運の高まりから子豚需要が急増し、子豚価格の上昇をけん引した。しかし、21年に入り、飼養頭数の回復と豚肉出荷量の回復により、豚肉価格は急激に下落した。22年は、9月の学校給食の再開や10月の祝日（国慶節・中秋節）などの需要期にかけて価格が上昇したが、その後は供給が増える中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による消費の後退から、価格は下落に転じた。23年は、前年の養豚企業の収益性悪化から繁殖雌豚のと畜向け出荷が進んだことなどにより増加した供給量が、消費量を上回った結果、豚肉価格は下落傾向

で推移した。

図12 子豚価格、生体出荷価格の推移



資料：中国農業農村部（子豚価格）、中国国家発展改革委員会（生体豚出荷価格）

## エ その他

2018年8月に発生したASFは中国全土に拡大し、養豚産業に大きな損害をもたらした。その後の19年8月から実施された増頭対策の効果もあり、20年は急速に生産規模を拡大させ、22年にはASF発生前の水準を超えるまでに回復した。この回復期に大きく生産規模を拡大したのが大手養豚企業である。大手養豚企業は厳格な衛生管理を導入し、農場への人の出入りを最小限に抑えるなどの取り組みを行った。その最たるものとして、ビル型の養豚施設が挙げられ、大きいものでは20階建て以上の養豚施設も存在している。



写真7 卸売市場での豚肉の販売風景（北京市内）



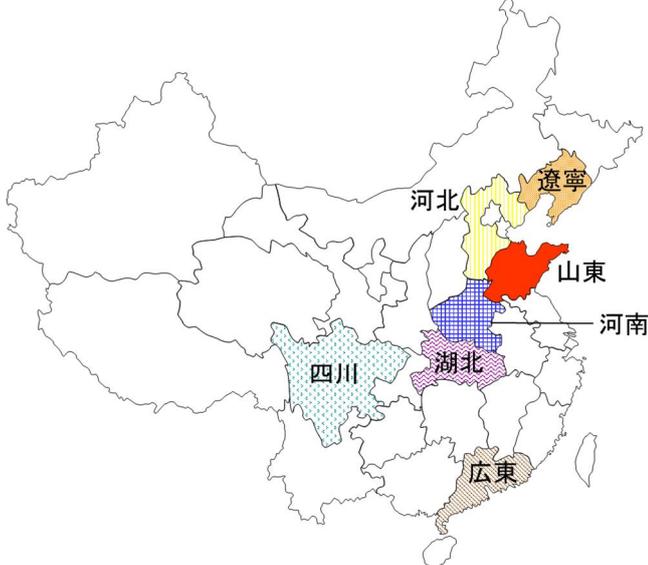
写真8 養豚ビル（広西チワン族自治区、提供：揚翔グループ）

(4) 養鶏・鶏肉産業

鶏肉は、豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が白羽肉鶏と呼ばれる海外品種であり、残りは黄羽肉鶏と呼ばれる在来品種などである。近年では小型の白羽肉鶏の育種・改良により、独自品種の普及が進められている。

地域別の飼養羽数を見ると、渤海沿岸部から内陸部での飼養が多く、上位7省で全体の5割強を占めている(図13、14)。家きんの飼養羽数は、2013年に発生した鳥インフルエンザにより一時的に減少したが、その後は増加に転じている。また、18年に発生したASFの影響により豚肉生産量が減少したことから鶏肉の代替需要が高まり、20年以降は、67億羽前後で推移している(図15)。ただし、飼養規模は零細なものが極めて多く、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.7%とかなりの割合を占めている(表14)。

図13 家きん飼養羽数上位7省

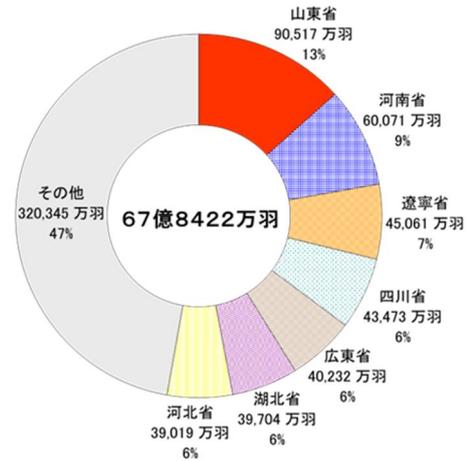


資料：中国農業部 「中国畜牧獣医年鑑」

23年の家きん肉の生産量は、1480万トン(前年比3.5%増)とやや増加した(図15)。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量は米国、ブラジルに次いで世界第3位となり、世界の生産量の14.3%を占めている。

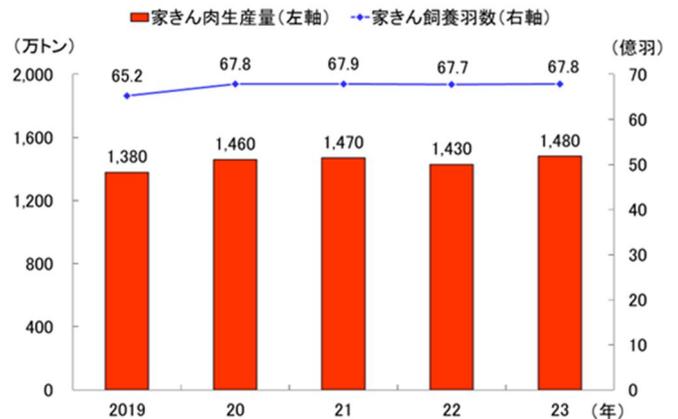
(注)「家きん」はブロイラー(肉用鶏)や採卵鶏、アヒルなど。

図14 省・自治区別家きん飼養羽数(2023年)



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：USDA/FAS「PSD Online」(生産量)、中国農業部「中国畜牧獣医年鑑」(飼養羽数)

表14 家きん(肉用)の出荷規模別の農場戸数(2023年)

(単位:万戸)

区分/規模	全体	1~1,999羽	2,000~9,999羽	1万~29,999羽	3万~49,999羽	5万~99,999羽	10万~499,999羽	50万~999,999羽	100万羽以上
戸数	1,796.6	1,773.5	11.7	5.3	2.7	1.8	1.2	0.2	0.2
割合	100.0%	98.7%	0.6%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

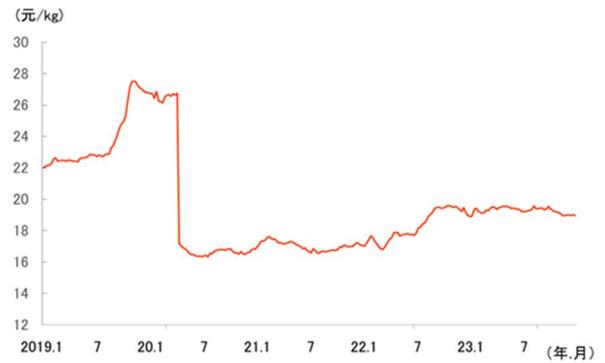
23年の鶏肉輸入量は、75.6万トンと前年を大幅に上回った（表15）。輸入先国などでの鳥インフルエンザの流行の影響はあったものの、外食産業での需要回復などが輸入をけん引したとみられる。

一方、23年の鶏肉輸出量は、鶏肉調製品を主体に55.4万トンと前年からやや増加した（表15）。主な輸出相手先は日本（輸出量全体の約6割）である。

また、鶏肉の卸売価格を見ると、ASFの流行による豚肉生産量の減少から、鶏肉需要が拡大した影響で、19年の卸売価格は高騰した（図16）。19年末から20年にかけて、鶏肉の供給体制がある程度整ったところで、COVID-19の感染拡大により、卸売価格は急落した。

その後、22年後半からは豚肉価格の高騰を受けた代替需要などから鶏肉価格も上昇してきている。

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」

表15 鶏肉需給の推移

(単位:万トン)

区分/年	2019	20	21	22	23
生産量	1,380	1,460	1,470	1,430	1,480
輸入量	58.0	99.9	78.8	63.3	75.6
輸出量	42.8	38.8	45.7	53.2	55.4
消費量	1,395	1,521	1,503	1,440	1,500

資料：USDA/FAS「PSD Online」



写真9 市場での丸どり販売風景（山東省済南市内）



写真10 市場での生鳥販売風景（山東省済南市

## （5）飼料穀物

中国はトウモロコシを重要作物の一つと位置付け、需給の安定を図るための穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、最低買付価格を保証する備蓄政策の実施などでトウモロコシ在庫が積みあがったことから、2016年4月にはこの保証政策を見直し、市場買い付けに移行した。

近年のトウモロコシの国内生産量は、飼料需要の拡大などを背景に増加基調にあり、2023/24年度は過去最高を記録した（表16）。また、消費量も飼料向けを中心に増加基調で推移している。生産量を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、内モンゴル自治区）で全体の約4割、さらに上位10省で約8割を占めている（図17、写真11）。

表16 トウモロコシ需給の推移

(単位:万トン)

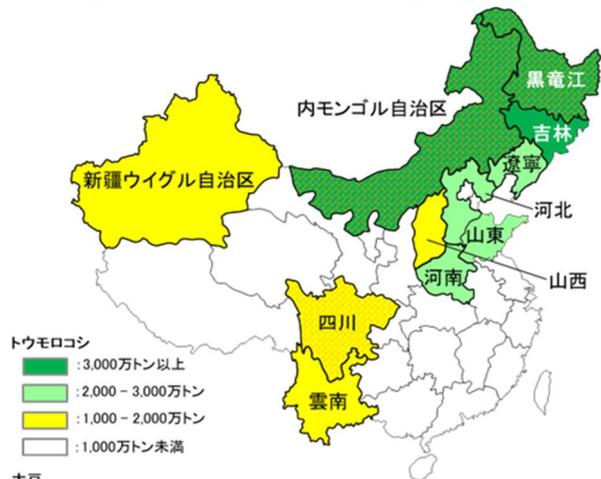
年度	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24
作付面積(万ha)	4,128	4,126	4,332	4,307	4,422
総供給量	47,854	49,071	50,014	50,503	51,820
国内生産量	26,078	26,067	27,255	27,720	28,884
期首在庫	21,018	20,053	20,570	20,914	20,602
輸入量	758	2,951	2,188	1,869	2,333
総需要量	27,801	28,500	29,103	29,901	30,700
国内消費量	27,800	28,500	29,100	29,900	30,700
飼料向け	19,300	20,300	20,900	21,800	22,500
食用・工業向けなど	8,500	8,200	8,200	8,100	8,200
輸出量	1	0	0	1	0
期末在庫	20,053	20,570	20,914	20,602	21,119

資料：USDA/FAS「PSD Online」

注1：生産年度は10月～翌9月。

注2：総需要量＝国内消費量＋輸出量。

図17 トウモロコシおよび大豆の生産分布



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」



写真11 中国のトウモロコシ畑（吉林省）

一方、大豆については、食用油原料用途のみならず、搾油後の大豆かすが家畜飼料原料に利用されており、これら国内需要の拡大を背景に大量に輸入されている。23/24年度を見ると、大豆の国内生産量2084万トンに対し、輸入量は1億1200万トンと過去最高を記録した（表17）。中国政府は国産大豆の増産を振興しているが、需要に追い付かない状況が続いている。このように、中国は大量のトウモロコシや大豆の輸入を行っていることから、世界の穀物相場を大きく左右させる存在となっている。

表17 大豆需給の推移

（単位：万トン）

年度	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24
作付面積(万ha)	933	988	842	1,024	1,047
総供給量	13,497	14,383	13,555	14,993	165,180
国内生産量	1,809	1,960	1,640	2,028	2,084
期首在庫	1,835	2,448	2,886	2,515	3,234
輸入量	9,853	9,974	9,030	10,450	11,200
総需要量	11,049	11,497	11,040	11,759	12,187
国内消費量	11,040	11,490	11,030	11,750	12,180
飼料向け	480	520	500	550	600
工業向け	9,150	9,500	9,000	9,600	9,900
食用向け	1,410	1,470	1,530	1,600	1,680
輸出量	9	7	10	9	7
期末在庫	2,448	2,886	2,515	3,234	4,331

資料：USDA/FAS「PSD Online」

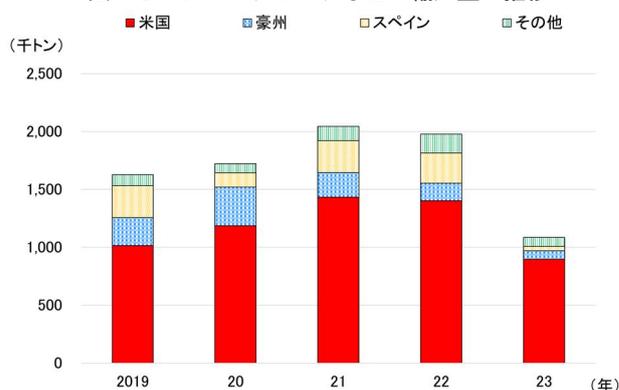
注1：生産年度は10月～翌9月。

注2：総需要量＝国内消費量＋輸出量。

注3：搾油向けは「工業向け」に含まれる。

また、近年は生乳生産が拡大する中で、乳牛の飼料としてアルファルファなどの乾牧草の輸入量も増加基調にあった（図18）。これら輸入形態は主に乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない。近年では米国からの輸入が過半を占め、豪州やスペインが続いている。23年は、乳製品需要の減退から生乳価格が継続的に下落した中で、生産コスト削減のために輸入乾牧草の利用が減少したことなどにより、輸入量が大幅に減少した。

図18 アルファルファなどの輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは1214。